CLA Award 2026

優　秀　賞


①


②


③

虎ノ門アルセアタワー ランドスケープ計画

株式会社三菱地所設計
西垣和真・植田直樹・津久井敦士・塚本敦彦・朱 豊
松尾教徳（元社員）
株式会社日本設計
栗栖一彰・新原昇三
大成建設株式会社一級建築士事務所
山下剛史・小池 亘・神田祐樹
独立行政法人都市再生機構
滝波洋祐・和田唯司

作品概要

作品名	虎ノ門アルセアタワー　ランドスケープ計画
所在地	東京都港区虎ノ門２丁目
事業主	独立行政法人都市再生機構
設計	プロジェクトマネージメント：独立行政法人都市再生機構 基本設計・デザインディレクション・工事監理： 日本設計・三菱地所設計共同企業体 実施設計：大成建設一級建築士事務所
設計協力	景観照明・ソラ・アソシエイツ
施工	外構サイン：6D
設計期間	2015 年 10 月～ 2020 年 8 月
施工期間	2020 年 9 月～ 2025 年 2 月
規模	9,219.33㎡
主要施設	立体的な緑化、壁面緑化、屋上緑化、植栽、園路 テーブル・ベンチ、サイン、景観照明　他

作品評

本作品は、高層建築の地上部およびデッキレベルにおける低層部に、建築内外を一体化した開放的なパブリックスペースと豊かな緑を整備したもので、多様なパブリックライフの基盤となる「街の要」を創出し、新たな都市景観の形成を目指している。

本作品の特色としている都市スケールと親密なスケールの街並みをつなぐ、人の活動と街並みを緑でつなぐ、ことには説得力のある説明が尽くされており、評価に値するものといえよう。ただ、本作品が建築サイドとの綿密な調整、一体的な計画のもとに創出された空間であることは想像に難くないが、逆にランドスケープ計画としてなし得た範疇の見極めを難しくしているともいえる。

なおいえば、重要な構成要素なっているデッキ上の植栽や壁面緑化における植栽基盤整備に関する具体的な記述が十分とはいえない。竣工後まだ経過年数が浅く、維持管理段階における検証にまでは至ってないが、植栽基盤整備の妥当性も含め計画で意図した持続性が実証されれば、より画期的なプロジェクトとして評価されるのではないだろうか。


④


⑤


⑥

①東側　地上部と２階レベルの
　立体的な緑と賑わい※
②東側　２階レベルのラグジュアリー
　な佇みの場
③東側地上部 賑わいが表出する
　緑と一体となるテラス※
④オフィスロビーの背景となる
　立体的な緑※
⑤カジュアルな佇みの場を形成する
　２階デッキ部
⑥街並みのスケールに適した景観形成

photo ※：Kokyu Miwa Architectural Photography

都市の風景をつなぎ直し、公共性を編み込むランドスケープ

計画地は飯倉台地北側の裾部に位置し、江戸時代には外堀南側に広がる武家屋敷地の一角を形成していた。霊南坂、汐見坂、葵坂に囲まれた起伏に富む地形を有し、古くは江戸期の錦絵にも描かれた水辺の風景に恵まれた歴史ある場所である。

周辺では複数の再開発が進行し、多様な都市機能が集積する虎ノ門エリアは大きな変容を遂げつつある。本計画では、地域固有の街並みや地形を丁寧に読み解き、多様な質感を備えたパブリックな場を街の中に織り込むことを目指した。これらの空間は「落ち着きのある街のラウンジ」として機能し、人々が思い思いに居場所を選び、開放性と静けさを感じられる環境を創出している。

地形を活かした立体的な緑と、新たなつながりを生む街並み

本計画では、人が立ち入らない余白に緑を配置するのではなく、人・まち・緑の良好な関係により新たな都市景観を形成することを目指した。そのため、建物低層部を中心に豊かな緑を配置している。周辺の起伏に富んだ地形や、地上部と２階デッキレベルを結ぶ複層的な歩行者ネットワークと一体となった立体的な緑を構築することで、地上・デッキ双方で身近に緑を感じられる回遊空間を実現している。

内外空間が一体となって生み出す、多様な居場所

虎ノ門エリアで働き、訪れ、過ごす人々に寄り添う場として、建物内外には多様な質感を持つ滞留空間を有機的に配置している。これらの空間は、気分や活動に応じて自由に居場所を選び、自分らしく時間を過ごせる開かれたパブリックスペースを形成している。さらに、建築と立体的な緑が一体となることで、「落ち着きのある街のラウンジ」を創出し、虎ノ門エリアに新たな魅力と活力をもたらす拠点となることを目指している。

維持管理と生育環境の綿密な検証による持続性の高い緑化

屋上緑化や壁面緑化による緑は、適切な維持管理と良好な生育環境のもとで持続的に街並みの魅力を支える都市基盤となる。植物の健全な生育に不可欠な日照条件の十分なシミュレーション等の検討を踏まえ、植栽への負荷を低減し、長期的な維持管理に配慮した持続性の高い緑を整備している。

CLA Award 2026

優　秀　賞


①

石田梅岩記念館

株式会社神田設計
吉川明宏
アトリエ心庭
鈴木邦浩
株式会社アルダー環境設計室
眞弓浩二
塩田有紀建築設計事務所
塩田有紀

作品概要

作品名――石田梅岩記念館
所在地――京都府亀岡市東別院町東掛六田18番地
発注――亀岡市
設計――（統括・建築設計）塩田有紀建築設計事務所 塩田有紀
（外構デザイン監修）アトリエ心庭 鈴木邦浩
（外構基本設計）株式会社アルダー環境設計室 眞弓浩二
（外構実施設計・積算協力）株式会社神田設計 吉川明宏
監理――（統括・建築）塩田有紀建築設計事務所 塩田有紀
（外構）株式会社神田設計 吉川明宏
施工――（建築・外構）栄・関西・丸正特定建設工事共同企業体
設計期間――2019年10月～2024年3月
施工期間――（造成）2023年10月～2024年2月
（建築・外構）2024年6月～2025年3月
規模――2998.11㎡
主要施設――記念館、東掛生命庭、回遊式園路、空石積

作品評

石田梅岩は江戸時代を代表する思想家であり、人は「天地自然と一体」の存在であると説いた。その思想は、自然を人間から切り離して眺めるものではなく、人の暮らしや営みもまた自然の一部として捉えるものであった。本作品の価値は、この石田心学の根幹を、記念館という建築だけでなく、梅岩が生まれ育った里山の風景そのものによって表現したことにある。

計画では、生家と里山を主役とし、記念館を風景の中に慎ましく位置づけている。地域の石材による石積み、流れ、草地、既存樹木を継承し、畔の草刈りなど地域住民の日常の営みまでも景観を育てる行為として受け止めている。そこには、新しい景観を「つくる」のではなく、この土地に受け継がれてきた自然、歴史、暮らしを「読み」、次代へつなぐ姿勢がある。

思想を展示物として「見る」「読む」だけではなく、風景の中を歩き、自然と人との関係を身体で「感じる」場へと昇華したことを高く評価したい。思想を風景に翻訳し、土地の記憶を未来へ継承する――そこにランドスケープ職能の本質的な役割が示されている。


②


③


④


⑤


⑥


⑦


⑧


⑨

①府道側全景　②山側全景（お墓から見下ろす）　③苔むした桝　④⑧⑨小学校の遠足（記念館でおにぎりを握って庭で食べる）
⑤梅岩ゆかりの蓮と寄進された欄干。園内に梅岩を顕彰の足跡が集積する。　⑥市内の菊花展の菊が飾られる
⑦田植：地域の営みとともにある風景　①②写真：鈴木文人

里山の「天地自然と一体」を体感するランドスケープ

本ランドスケープは「梅岩の里生誕地整備事業」の一環として、石田梅岩記念館とともに整備された。

石田梅岩（1685-1744）は、道徳と経済の両立を説いた江戸時代の思想家で、最盛期には全国182もの講舎で学ばれた「石門心学」の祖である。本事業では、各地の講舎で受け継がれてきた遺品や書物を集約・保存する収蔵庫を核としながら、屋内外に多様な学びと交流の場を創出している。

周辺は「梅岩の里」と呼ばれ、江戸時代とさほど変わらない里山に梅岩の生家が現存している。周囲の田畑を含め、現在もご子孫の暮らしが営まれている場所である。

人は「天地自然と一体」であると説いた梅岩。この地で何より大切にすべきものは、生家と、梅岩が幼少期を過ごした里山の風景であると考え、それらを主役として尊重する景観を形成した。

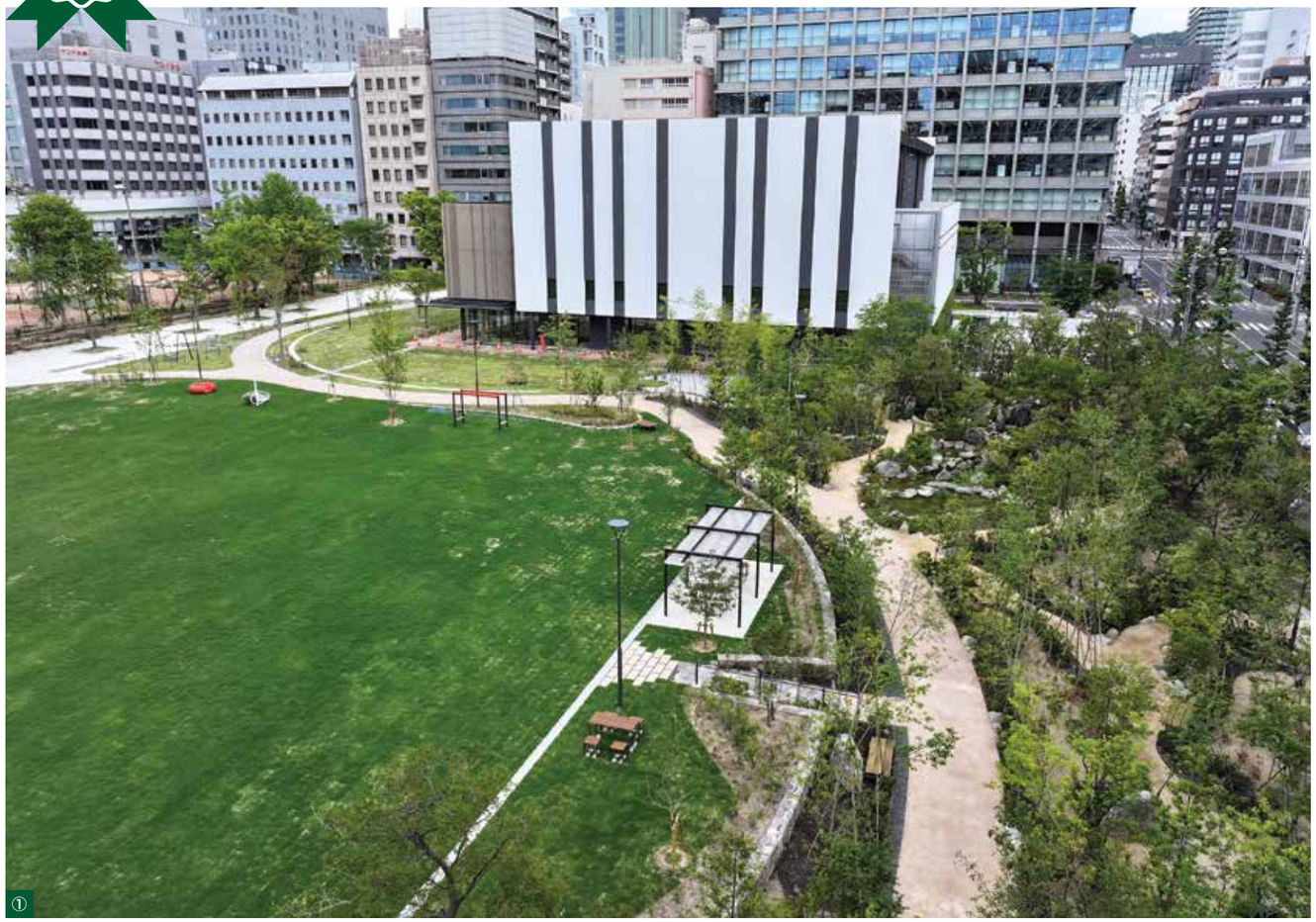
山側には、湧水を生かした流れを設け、生家や墓所などを巡る回遊園路を計画、これまで寄進されてきた石碑や樹木を再配置している。来訪者が歩きながら、生誕地の風景と歴史、梅岩を顕彰してきた人々の営み、そして風や水、生き物といった里山の自然に触れ、それぞれの時間を過ごせる場とした。

景観全体の基壇となる府道側の斜面には、地元の石材を用いた空石積みを施し、生家の石積みとの連続性を生み出した。田圃との間は草地とし、年月とともに畦と草地が馴染み、一体的な田園風景となることを目指している。石積みや畦は、地域の人々にとり暮らしの一部でもある。暮らしの延長で地域の人が関わり続けることで、計画地と周辺の風景は真に一体のものへ育っていく。

里山の環境と地域の文化、そこに関わる人々の活動の積み重ねを受け継ぎながら、梅岩を顕彰する思いと地域への愛着を、静かに未来へ育んでいく場。現在では、地元小学校の遠足や墓前祭などの恒例行事、地域の交流会、遠方からの来訪者との交流を通じて、のどかな里山の風景に新たな営みと歴史が重なり始めている。

CLA Award 2026

優　秀　賞



磯上公園の再整備
～都心におけるみどりの癒し空間の創出～

株式会社空間創研
泉 崇・日野誠次・荘田隆久・古屋 章・野見山志帆
山川弘子・寺田佳代
KurisuLLC
栗栖宝一

磯上公園は三宮南エリアに位置する都心の貴重なオープンスペースであり、長きにわたり有料グラウンドとして団体スポーツを中心に利用されてきた。周辺環境の変化や都心・三宮再整備の進展に伴い、公園が担う役割や機能を改めて見直す必要が生じたことから、同事業の一環として再整備が実施された。

再整備にあたっては、周辺に東遊園地、みなとのもり公園（神戸震災復興記念公園）、小野浜公園の３つの公園があり、それぞれの公園が持つ特徴を活かすことや、機能の分担を考慮する必要があり、磯上公園は、都心回遊の拠点、憩いと賑わいの場としての利活用が広がる公園とすることを目指した。

地域に関わる多様な人々集い、交流することのできる場の創出

計画地の中央には、有料のグラウンドとしてこれまで供用されてきた歴史に配慮し、子供たちのちょっとしたボール遊びにも対応できるよう広さを確保しつつ、地域イベントの開催等、多目的に利用できる芝生広場を整備した。

計画地西側には、既存樹の緑陰を活かした休憩施設の充実を図りつつ、十分な幅員を確保したプロムナードを整備し、フリーマーケット等のイベント開催に対応した園路空間を整備した。

自然を身近に感じられ、都心に生活、働く人々が健康で癒される空間の整備

都市生活の中で、人々が足元の自然に意識を向けること、植栽とのかかわりを自然に持つこと、都心に豊かな自然を取り戻していくことで、生活者と都市と自然が共に生きる神戸を目指す市の「Living Nature Kobe」における「自然の景」の取り組みと連携し、磯上公園内に都心で暮らす人々、働く人々が自然を感じて憩い、安らぐことのできるヒーリングガーデンを整備した。ヒーリングガーデンは、癒し（ヒーリング）をテーマとして世界的に活躍する造園家 栗栖宝一氏のデザイン監修を元に実施設計を行った。

地域に暮らす子供や家族、高齢者が、気軽に遊び、憩える空間の整備

計画地で開催したワークショップ（遊具等の人気投票）を参考に地域に暮らす子供が日々の暮らしで気軽に遊べる遊具や、体育館利用者や高齢者の健康づくりに供する健康遊具を設置し、それぞれの機能の違いや周囲の景観とのバランスも配慮した。

地域に開かれたアクセスの良い開放的な利用者動線の創出

これまでのグラウンド機能及び南北に高低差のある地形により周辺街区に閉鎖的な公園となっていたことから、空間構成、動線を改善し、周辺の利用者がアクセスしやすいバリアフリーに対応した利用者動線を整備した。

作品概要

作品名――磯上公園の再整備～都心におけるみどりの癒し空間の創出～
所在地――兵庫県神戸市中央区八幡通2丁目
発注――神戸市
設計――株式会社 空間創研
設計協力――KurisuLLC：栗栖宝一
監理――神戸市
施工――関西造園土木株式会社、一般社団法人神戸市造園協力会
設計期間――2021年9月～2023年3月
施工期間――撤去工事2022年10月～2023年1月
　　整備工事2023年9月～2024年6月
規模――1.0ha（全体2.0haのうち）
主要施設――ヒーリングガーデン、芝生広場、プロムナード、
　　磯上体育館、三木記念会館、外国人スポーツクラブ（占用）、
　　耐震性貯水槽

作品評

本作品は、神戸市三宮都心部の再整備事業の一環として再整備された公園のランドスケープデザインである。

対象公園は、周辺土地利用や人口増加等の社会環境の変化に対応できる新たな空間のあり方が求められていたが、応募者はこの課題に対して、周辺に立地する3つの公園との機能分担を行い、そこから「都心回遊の拠点・地域に開かれた憩いと賑わいの場」という分かりやすい再整備のコンセプトを導き出している。

また、このコンセプトに沿って、広々とした芝生広場・遊具広場・プロムナード・ヒーリングガーデンで構成される、解放的で緑の存在が強く感じられる空間を生み出している。

このうち、本公園を特色づけるヒーリングガーデンは、緑の少ない市街地に身近な自然を提供する場として、日本庭園の鑑賞の場として、再整備の効果を実感させる空間となっている。

設計部門の応募作品として、ディティールに関する図面や説明の不足が指摘されたが、空間の構成や実際のデザインの良さが高く評価され、優秀賞に選出された。















①ヒーリングガーデンの豊かな緑と連続して広がる芝生広場　②ヒーリングガーデンへ来園者を誘う北側エントランス
③既存樹を活かしたマーケット等の開催に対応するプロムナード　④雑木に包まれリフレッシュの場となる園路空間
⑤水の音を聞き、自然と向き合うヒーリングガーデンの滝と池　⑥自然に目を向け自分と出会う機会の場となる散策路
⑦木漏れ日の中で岩と対話する休憩スポット　⑧自然を感じて憩う伐採木を活用したベンチ

CLA Award 2026

特　別　賞



①

新たな公民連携による子育て空間の創出
―長岡公園リノベーション

株式会社空間創研
野見山志帆・橘俊光・日野誠次・荘田隆久
株式会社 SALHAUS
安原 幹・坂口真一・野口万莉乃（元社員）

1. 再整備事業の背景と経緯

長岡公園は、京都府長岡京市の中心部に位置し、長岡天満宮に隣接する地区公園である。1982年の供用開始から40年以上が経過し、施設の老朽化や樹木の繁茂が顕著であり、再整備が必要な状況であった。

長岡京市と、同市に本社を置く世界的な総合電子部品メーカーの株式会社村田製作所は、地域の発展と持続可能なまちづくりを目的とし、包括連携協定を2022年5月に締結した。同年10月には、長岡京市の市制施行50周年事業の一環として、長岡公園再整備のための協定を締結し、事業を推進した。

2. 公民連携の新しい形

最大の特徴は、村田製作所が主体的・積極的に取り組み、基本構想・計画、測量、設計、工事発注・監理までの費用を全額負担するとともに、自ら執行し、その完成した公園施設を市へ寄附（物納）した点にある。株式会社空間創研は村田製作所の委託を受け、協議・調整を進めるとともに全体マネジメントを担い、事業を推進した。長岡京市、村田製作所、空間創研の三者が協議を重ね、完成まで一体的に進めることができた。

3. 再整備方針と主な整備内容

村田製作所が設置した有識者懇談会（委員長：美濃伸之兵庫県立大学大学院・兵庫県立淡路景観園芸学校教授）において、再整備コンセプト「多様な人々が集い、安らぎ、公園で過ごす時間を楽しむこれからの長岡公園」が定められた。出会いゾーンとセンターゾーンを中心とした約1haを整備区域と設定し、多様な世代の来訪を目指し、これまでは利用が少なかった子育て世代に重点を置いた新たな空間を整備した。

開かれた空間づくりを目指し、ランドスケープと建築が連携してセンターゾーンの計画を行った。公園利用の中心となるセンター棟「fuRari（ふらり）」（愛称）には休憩室や授乳室、小上がりを設け、隣接する乳幼児の遊び場「ふんわり原っぱ」と一体的・連携した空間づくりを行った。子どもの遊び場「でこぼこ広場」は、凹凸のある地形が様々な感覚を刺激し、子どもたちが自由に動きまわる遊び場である。センターゾーンは、子どもを介した新たな交流の場、地域で子育てに関わる場として役割を果たす空間である。

4. 公園への親しみを育み、深める取り組み

リニューアルオープン時に村田製作所の社員有志から207冊の児童・幼児図書が寄贈された。寄贈者から本を手に取る方へのメッセージが添えられた図書もあり、公園で過ごす時間に楽しみを添えるアイテムとなっている。

また「fuRari（ふらり）」では、保護者の育児相談・交流の場「こども保健室カフェ」や市民団体による絵本の読み聞かせ会、村田製作所による電子工作教室・防災教室など、子どもや親子向けのイベントが継続的に開催されており、地域に根差した取り組みが今後も継続・発展し、地域に愛され、使い続けられることが期待される。

5. 事業実施の効果

今回の再整備事業は、村田製作所から提供された場所・人材・ノウハウなども最大限に活かすことで、事業の円滑な進行につながり、構想から公園完成までを約3年で実現した。公民連携により効率的かつ効果的に事業を推進した事例といえ、今後の公園再整備を考える上でもモデルケースとなる取り組みである。

再整備により、幼児から年配の方まで多様な人々が長岡公園を訪れ、集い、安らぎ、公園で過ごす時間を楽しまれている。

作品概要

作品名――新たな公民連携による子育て空間の創出
　　―長岡公園リノベーション
所在地――京都府長岡京市天神 2丁目
発注――株式会社 村田製作所
設計――株式会社 空間創研
建築設計――株式会社 SALHAUS
監理――公園工事：株式会社 空間創研
　　建築工事：株式会社 SALHAUS
施工――株式会社 日比谷アメニス
設計期間――公園基本構想～実施設計：2022年 6月～2024年 3月
　　建築基本設計～実施設計：2023年11月～2024年10月
施工期間――2024年 8月～2025年 8月
規模――約1ha（公園敷地3.96ha）
主要施設――憩いの広場、乳幼児の遊び場、子どもの遊び場、駐車場、駐輪場、センター棟（休憩室、授乳室、小上がり、トイレ）、屋外滞在空間

作品評

本事業は株式会社村田製作所（以下、「事業者」という。）が、自身の費用によって地区公園の再整備を行って長岡京市に寄付したものである。応募者は市と事業者との協議・調整、計画・設計等を行って、事業推進のトータルマネジメントを担った。応募者の行った業務は、基本構想立案、基本計画策定、測量、基本設計・実施設計、工事発注・管理及び協議・調整に及んでいる。

都市公園事業は新たに作ることから管理運営に転換しつつある。都市公園は老朽化が進み、社会のニーズに合わなくなっている面があり、再整備が必要になっている。しかし、自治体は予算が限られているため再整備は進まない。本事業は老朽化した公園を、民間企業が市に代わって再整備に取組んだ事例である。

応募者は老朽化している都市公園を、民間企業が社会貢献として再整備を行う事業の支援を行った。公園の専門家として計画・設計にとどまらず、プロジェクト全体のマネジメントを成し遂げた。この取り組みは高く評価される。ランドスケープコンサルタントの新たな領域を開拓した功績に賛辞を惜しまない。



②

③

④



⑤



⑥



⑦



⑧

①センター棟「fuRari（ふらり）」はランドスケープとシームレスにつながり、開放的で居心地の良い空間を提供している　②長岡公園再整備事業の全体スキーム図
③センターゾーンを上空より望む　④センター棟「fuRari（ふらり）」　⑤子どもの遊び場「でこぼこ広場」　⑥乳幼児の遊び場「ふんわり原っぱ」
⑦寄贈された児童・幼児図書と小上がり　⑧村田製作所による電子工作教室　①、③、④、⑥、⑦の写真：笹倉洋平

CLA Award 2026

奨　励　賞



防潮堤から全体をのぞむ

大槌町鎮魂の森あえーる

株式会社総合設計研究所
大瀧英知・大石佳奈・加藤雄介
株式会社プレック研究所
酒井学（元社員）・宮脇侑子

大槌町鎮魂の森あえーるは、東日本大震災の犠牲者に対する「追悼・鎮魂」とともに、震災の記憶と復興への想いを未来へ伝えるための場である。

計画では、遺族や町民の声を丁寧に拾い上げ、静かに祈る「追悼の場」と、日常的に人々が集い憩う「復興の広場」を一体的にデザインする方向性を定めた。

芳名碑、献花台、地域の湧水を表現した水盤を祈りの核とし、人々が集い憩う芝生広場や、大槌町の郷土樹種による森、仮設住宅で人々の心を支えた地蔵尊を配置した。芳名が広場を見守り、広場で過ごす人々が自然に追悼の場の存在を感じられる「茶の間の仏壇」のような空間とした。

また、園内を巡りながら震災の記憶と教訓を学べる構成とし、植樹や育樹への町民参加を通じて、森を育てながら記憶を次世代へ継承していく、祈りと日常が共存する場を目指した。

作品概要

作品名——— 大槌町鎮魂の森あえーる
所在地——— 岩手県大槌町須賀町
発注——— 岩手県大槌町
設計——— 株式会社総合設計研究所（基本設計・実施設計）
株式会社プレック研究所（基本計画）
設計協力—— AL建築事務所、YUTO YAMADA DESIGN STUDIO
株式会社 nosight
設計期間—— 2017年11月～2021年3月（基本計画）
2021年9月～2023年6月（基本設計・実施設計）
施工期間—— 2023年7月～2025年6月
規模——— 約1.5ha
主要施設—— 追悼の場（芳名碑、献花台、水盤）、復興の広場（芝生広場、ベンチ）、
地蔵尊の森、暮らしの森、トイレ

作品評

本作品においては、追悼、鎮魂というセンシティブな側面をもつ計画、設計を進めるにあたり、各方面の専門家によって構成される検討委員会による審議や助言、また、住民ワークショップ、パブリックコメント、あるいは遺族アンケートなどの実施によって丁寧に町民の意見を拾い上げている。

祈りの核となる追悼の場においては、その構成要素となる芳名碑、献花台などを非常に細やかな心配りと遺族・町民の心情に寄り添った設計を追及していることが読み取れ、評価のポイントとなった。

他方、空間構成の重要な要素となっている記憶の森、花の森などに関する植栽計画についての説明が十分とはいえない。樹種構成が低木のみで森と呼ぶにふさわしい環境となるのか、将来的に安定した樹林を形成するのに十分な広がりや植栽密度、あるいは管理が担保されているのか、といった懸念材料も散見された。きめ細やかな設計手法が、植栽計画においてもしっかりと踏襲されていることが理解されるような提示がなされていれば、より高い評価となったと思われる。

CLA Award 2026

奨　励　賞

設計部門







①日比谷通りより望む建物外観　②水景や緑があふれる地上部の広場
③都市の軸線を引込むランドスケープ

田町タワー

株式会社三菱地所設計　松岡央真・坪田勇人・佐藤雄紀・中村大紀
株式会社スタジオ・ゲンクマガイ　熊谷 玄・中村 覚

本計画敷地は、デッキレベルに改札を有するJR田町駅西口に近接し、地下鉄駅である都営浅草線三田駅の地上出入口を含む。そのため計画を通じて、総合設計制度を活用し、複数層を一体的に再編することで、広がりのある緑豊かな広場空間の形成を目指した。

また、かつては海に面する江戸の西の玄関口であり、江戸無血開城の会見が行われた薩摩藩の蔵屋敷があったことを踏まえ、歴史と地理的特性を踏まえたランドマークとなる建物計画が求められた。

外構計画においては、「URBAN NAVIGATOR」をコンセプトに、日比谷通りの斜め45度の軸線、折り鶴のような建物頂部や着物和装のように外装面が重なり合う形状に呼応しながら、人々をみどり豊かな広場空間へ誘うランドスケープデザインとした。

地上部の広場空間では、かつての芝の水辺を感じられるような水景や、植栽帯と一体となったベンチなどを計画し、地域の多様な人々が思い思いに過ごせる場所を創出している。

作品概要

作品名——— 田町タワー
所在地——— 東京都港区芝5-33-1
建築主——— 株式会社田町ビル／徳栄商事株式会社／三菱重工業株式会社
設計監理—— 株式会社三菱地所設計
設計協力—— 株式会社スタジオ・ゲンクマガイ
施工——— 清水建設株式会社
設計期間—— 2019年10月～2021年1月
施工期間—— 2021年 2月～2023年9月
規模——— 敷地面積　8,617㎡　延床面積　112,372㎡
地上29階、地下2階、塔屋1階
主要施設—— 広場、植栽、水景、ベンチ、景石、サイン、記念碑、屋上緑化、壁面緑化　他

作品評

動線計画や空間デザイン、将来計画に至るまで、細部にわたり丁寧に検討された完成度の高い計画である。特に、敷地内で完結するのではなく、周辺施設との関係性を積極的に創出し、それぞれの空間をシームレスにつなげようとする考え方は高く評価できる。また、人の動きを的確に捉えた動線計画と、その要所に適切な滞留空間を設けることで、歩く、立ち止まる、交流するといった多様な行動を誘発する空間構成も優れている。一方で、建築や動線、施設配置に対する明快なコンセプトと比較すると、植栽については、その構成や樹種選定、景観形成に込められた意図が十分に伝わらず、ややコンセプトが希薄に感じられた。全体として質の高い計画ではあるものの、建築的な空間構成が主となっており、ランドスケープを評価するCLA賞としては、植栽を含めたランドスケープデザインのさらなる深化を期待し、奨励賞とした。

CLA賞の趣旨と募集・選考のあらまし

CLA賞選考委員会委員長　千葉大学園芸学研究院 教授　**木下 剛**

CLAはランドスケープ分野のプロフェッショナルが会員となっている団体であり、CLA賞は、「会員の優れた作品、優秀な業務を顕彰し、広く社会に紹介すること」を目的として設けられました。

応募者の皆さまにおかれましては、本賞への応募を通じ、当該業務の成果や品質を再確認していただくとともに、本賞の受賞が、今後のさらなる業務推進に向けた機会となれば幸いです。

本年度も2026年5月1日から1か月間の募集期間で「設計」、「調査・計画」、「マネジメント」の3部門で募集を行い、設計部門に8社、11作品の応募がありました。応募された皆さまには厚く御礼を申し上げます。今後とも会員の皆さまには積極的に応募していただき、当協会内のみならず広く社会に作品を紹介することで、我が国のランドスケープの、一層の質の向上と、社会による認知の向上にご協力をいただきたく存じます。

本年度の応募作品は昨年度と同様、すべて設計部門のみであり、調査・計画、マネジメント部門の応募はありませんでした。このような状況は、我が国におけるランドスケープアーキテクトの広範な業務を反映しているとは言い難いところです。後述するように、今回の応募作品の中には、「マネジメント」部門として評価できるものもありました。「調査・計画」「マネジメント」はランドスケープアーキテクトの重要な業務であり、その量は決して少なくないにもかかわらず応募がない（あるいは難しい）という状況があるとすれば、そうした業務や職能の、社会への訴求力を弱めることにつながります。引き続きこれらの部門への、奮ってのご応募を検討いただくとともに、CLAとしても応募が増えない理由の解明に向けた取組が必要ではないかと認識しています。

今回の応募に係るその他の特徴としては、約半数が施設の老朽化、植栽の衰退などを契機とした公園等の再整備、リニューアルという性格を備えた設計対象であることが挙げられます。今日的な公園緑地整備の課題を反映したものになっていると言えそうです。また、単に基本設計、実施設計という範疇にとどまらず、その前段における調査・構想・計画レベルに力点を置くものや供用後の管理、運営段階に特徴性をもつものなど、募集にあたって設定した3部門の枠に収まらない作品もみられました。既にこうした傾向に関する議論はなされてきていますが、CLA賞の応募部門のあり方については、継続的に検討を進めていきたいと考えております。

本年度の選考委員会における公正かつ慎重な審議の結果、最優秀賞1作品、優秀賞3作品、特別賞1作品、奨励賞2作品を選出しました。

最優秀賞「百道中央公園 インクルーシブな子ども広場整備」は、全国的に拡大しているインクルーシブな公園づくりの先駆的事例として、ワークショップ自体のインクルーシブ化、障害の内容に応じた遊び場の細分化などその設計プロセスやチャレンジ性などが高く評価されました。優秀賞「虎ノ門アルセアタワー ランドスケープ計画」は、高低差のある敷地を活かし建築との一体的な計画によって街の要となる緑豊かな空間が形成されている点、「石田梅岩記念館」は梅岩の思想の根幹を生まれ育った里山の風景そのものによって表現した点、また、「磯上公園の再整備 ～都心におけるみどりの癒し空間の創出～」は開放的な空間構成や質の高いデザインが評価されたものです。特別賞の「新たな公民連携による子育て空間の創出―長岡公園リノベーション」は、民間企業が社会貢献として再整備を行う事業の支援という枠組みの中で、プロジェクト全体のマネジメントを成し遂げており、ランドスケープコンサルタントの新たな領域を開拓した取り組みとして評価されました。「奨励賞」には「大槌町鎮魂の森あえーる」「田町タワー」の2作品が選出されました。

CLA賞は、出来上がった「作品」のみを評価するのではなく、「自らの提案をクライアントやユーザーとの議論の中で練り上げ、それらを社会に正しく解りやすく説明する」コンサルタントとしての業務遂行能力が評価の大きな部分を占めていると考えます。作品の社会的意義や技術的先駆性等を言葉で表現するのはもちろんのこと、受託者が託された課題をどのように把握し、課題解決のためにどのように提案を導き出したのか、それらを限られた紙面の中で適切に表現することもまた、本賞の評価対象です。

社会に対してランドスケープアーキテクトという職能をアピールしていくためには、良質な作品を世に送り出し、適切に発信していくことが欠かせません。本賞が単にCLA内部の顕彰制度にとどまることなく、そうした社会へ発信していくための重要な媒体となり、会員企業、ならびに技術者の皆さまのランドスケープコンサルタントとしてのより一層の技術力向上に繋がることを願っています。以上、CLA賞選考のご報告とさせていただきます。

選考委員会

委員長	**木下 剛**	千葉大学園芸学研究院 教授
副委員長	**内藤 英四郎**	CLA 顧問
委員	**入江 彰昭**	東京農業大学 教授
委員	**伊藤 幸男**	（一社）日本造園建設業協会 副会長
委員	**宇戸 睦雄**	CLA 技術委員長
委員	**浦田 啓充**	（一社）日本公園緑地協会 常務理事
委員	**片山 壮二**	国土交通省 大臣官房審議官
委員	**佐藤 英介**	（一社）全国１級造園施工管理技士の会 会長
委員	**塚原 道夫**	CLA 広報委員長

（敬称略　50音順）

2026年CLA賞　受賞技術者プロフィール

大杉哲哉（おおすぎてつや）



1982年東京農業大学造園学科卒業、株式会社アーバンデザインコンサルタント入社。公園計画設計、街なみ環境整備、道路修景設計、土地区画整理事業等の多様な業務に携わる。ワークショップを活用した住民参加に多くの実績を有する。現在代表取締役社長。技術士（建設部門）。登録ランドスケープアーキテクト（RLA）。

棚町修一（たなまちしゅういち）



1955年福岡生まれ。1978年九州芸術工科大学環境設計学科卒業。公園緑地計画・設計・監理、文化財関連の計画・設計に携わる。近年は、主に文化財の保存・活用計画を通じて、魅力あるまちづくりに取り組んでいる。技術士（建設部門・総合技術監理部門）、一級建築士。

小峯 裕（こみねゆたか）



1997年山口大学工学部社会建設工学科卒業。株式会社アーバンデザインコンサルタントに入社後、住民参加、協働のまちづくりの支援に携わる。住民の声やアイデアを形にして、利用者の笑顔あふれる空間づくりを求め続けている。一級建築士。

福岡李奈（ふくおかりな）



2019年西日本短期大学緑地環境学科卒業。2019年株式会社アーバンデザインコンサルタント入社。入社後は、公園緑地の設計や文化財の計画策定、ワークショップの運営に従事。

首藤紗奈（しゅとうさな）



2023年東京農業大学造園学科卒業。2023年株式会社アーバンデザインコンサルタント入社。入社後は、設計業務やワークショップの運営に従事。

堤八恵子（つつみやえこ）



1978年九州芸術工科大学環境設計学科卒業。1985年株式会社アーバンデザインコンサルタント入社。造園設計、景観、広告物やまちづくりの調査設計を経て、現在代表取締役会長。「幸せ思考」をモットーに、都市・地域・NPO・企業等のマネジメント支援を行っている。技術士（建設部門・総合技術監理部門）。

西垣和真（にしがきかずまさ）



1982年生まれ。2007年東京農業大学大学院農学研究科造園学専攻修了。㈱岩城を経て、2016年より三菱地所設計。一級造園施工管理技士、登録ランドスケープアーキテクト。主な業　務：JAPAN SPORT OLYMOIC SQUARE、高円宮記念JFA夢フィールド、大阪堂島浜タワー・堂島川水辺空間整備　等

植田直樹（うえだなおき）



㈱三菱地所設計エグゼクティブフェロー・ランドスケープ設計室長／博士（社会工学）／技術士／東京大学非常勤講師。1965年東京生まれ。丸の内仲通り、丸の内パークビル・一号館広場、パレスホテル東京、グランモール公園、コモレ四谷、ジャパン・スポーツ・オリンピック・スクエアなど。

津久井敦士（つくいあつし）



1977年群馬県高崎市生まれ。
登録ランドスケープアーキテクト(RLA)。一級造園施工管理技士。
2011年より三菱地所設計。現在、同社都市環境計画部ユニットリーダー。
主な担当プロジェクトに、MUFG PARK、グランモール公園再整備（横浜市）、コモレ四谷、大手町フィナンシャルシティ グランキューブ・星のや東京、等。

塚本敦彦（つかもとあつひこ）



1969年生まれ、1995年京都大学大学院修士課程修了、1995年三菱地所入社
現在、三菱地所設計人事企画部長
主な業務　MUFG PARK、新宿イーストサイドスクエア、ふなばし森のシティ、大手町フィナンシャルシティグランキューブなど

朱 豊（しゅほう）



2018年京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻景観設計学分野修士課程修了、三菱地所設計入社。現在、都市環境計画部プランナー。近年の主な業務として、「JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE」、「MUFG PARK」等ランドスケープ設計業務及び「Tokyo Torch Tower地下接続工事」等都市土木設計・監理業務に携わる。

栗栖一彰（くりすかずあき）



1980年大阪府生まれ。2004年東京大学大学院新領域創成科学研究科修了、同年日本設計入社。現在、同社建築設計群チーフ・アーキテクト。虎ノ門アルセアタワーでは、基本設計、デザインディレクション（街区全体のデザイン監修）に従事。

新原昇三（にいはらしょうぞう）



1987年兵庫県生まれ。2011年首都大学東京大学院都市環境科学研究科修士課程修了、同年日本設計入社。現在、同社建築設計群主管。虎ノ門アルセアタワーでは、基本設計、デザインディレクション（街区全体のデザイン監修）に従事。

山下剛史（やましたたけふみ）



1967年生まれ。1991年大阪大学工学部建築工学科卒業後、同年大成建設入社。
現在、同社設計本部先端デザイン部ランドスケープデザイン室室長

小池 亘（こいけわたる）



1970年生まれ。1993年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業後、東京ランドスケープ研究所入社。
2005年大成建設入社。
現在、同社設計本部先端デザイン部ランドスケープデザイン室プロジェクト・ランドスケープアーキテクト

神田祐樹（かんだゆうき）



1973年生まれ。1997年日本大学農獣医学部農学科卒業。
2005年ルイジアナ州立大学ランドスケープ学科修士課程修了後TBG Partnersヒューストン事務所を経て2008年大成建設入社。
現在、同社設計本部先端デザイン部ランドスケープデザイン室シニア・ランドスケープアーキテクト

滝波洋祐（たきなみようすけ）



1973年新潟県生まれ。新潟大学農学部生産環境科学科卒業。2005年（独）都市再生機構入社。近年の主な業務として、ヌーヴェル赤羽台、URまちとくらしのミュージアム、コンフォール茅ヶ崎浜見平、コンフォール柏豊四季台、コモレ四谷 等

和田唯司（わだただし）



1998年よりUR都市機構（旧住都公団）所属。以降様々な地域・職域を経たなかにあって、虎ノ門二丁目地区アルセアタワーに関わりを持てたことを僥倖に感じます。関係する皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

塩田有紀（しおたゆき）



1973年東京都生まれ。1997年東京芸術大学大学院修了。NTTファシリティーズ、デザインリーグを経て、塩田有紀建築設計事務所設立。一級建築士。愛知産業大学・愛知淑徳大学・名古屋学芸大学非常勤講師。
住宅から公共施設まで、いきいきとした場が生まれるためのデザインを実践を通じ日々考えている。
趣味は陶器（雑器）の窯元を巡る旅。

鈴木邦浩（すずきくにひろ）



1972年愛知県生まれ。
愛知産業大学造形学部建築学科卒業。
造園設計事務所、造園会社、外構設計会社を経て2011年アトリエ心庭を設立。
現在、「庭は、小さな森」をコンセプトに人と自然が共存する庭づくりを提案している。

眞弓浩二（まゆみこうじ）



1956年 三重県生まれ
1979年 大阪芸術大学芸術学部環境計画学科卒業
1979 ～ 1984年
グラウンドアート
1984年 アルダー環境設計室 共同設立
2000・2002・2003年 岐阜女子大学非常勤講師
リタイア後は、アーキツーリズムと里山保全活動支援、庭木の手入れと家庭菜園に勤しんでいる。

吉川明宏（よしかわあきひろ）



1964年　愛知県常滑市生まれ。1987年　名城大学理工学部土木工学科卒業。1987 ～現在
神田設計
現在、神田設計　代表取締役社長。愛知産業大学非常勤講師。
ランドスケープの設計により、自然環境が良くなり、また、地域住民が元気に過ごせるように貢献します。
趣味は、マリンスポーツ、手品

栗栖宝一（くりすほういち）



1939年広島県生まれ。早稲田大学文学部卒業。造園家の小形研三氏のもとでランドスケープデザインを学ぶ。その後、渡米し、アメリカ全土で日本庭園をベースとした癒しの庭を作庭。1972年に栗栖インターナショナル株式会社（現・kurisuLLC）を設立、北米有数の日本庭園専門の造園会社として成長。磯上公園ヒーリングガーデン、設計・施工を全面的に監修。

古屋 章（ふるやあきら）



1959年岡山県新見市生まれ。1982年京都芸術短期大学卒業。（株）空間創研設計部長。主に公園緑地の基本設計、実施設計に従事。その場の必然と魅力ある情景づくりを妄想中。

山川弘子（やまかわひろこ）



1981年生まれ。岐阜大学大学院工学研究科土木工学専攻修了。大学院で都市景観評価を研究。河川計画、河川環境調査などの建設コンサルタント業務を経験して一念発起。現在は（株）空間創研に所属。全国都市緑化フェアや公園設計に携わっている。水辺のランドスケープづくりに興味がある。技術士（建設部門）。

寺田佳代（てらだかよ）



滋賀県立大学大学院環境科学研究科環境計画学専攻博士前期課修了。
株式会社ジイケイ京都で空間・環境デザインに関わる。
2022年 株式会社空間創研に入社。民間の業務を中心に、公共事業（公園・緑地・文化財保存）に携わる。

泉 崇（いずみたかし）



1973年名古屋市生まれ。1997年金沢美術工芸大学工業デザイン専攻卒業。同年、（株）空間創研入社。公園緑地の実施設計を主体に、様々な業務に従事。「場」の特性を見つめ、時間の経過とともに心地よく魅力的なものとなる「場づくり」を目標に仕事に取り組んでいます。

荘田隆久（しょうだたかひさ）



1972年大阪市生まれ。1994年京都嵯峨美術短期大学環境デザイン学科卒業。現（株）空間創研取締役。大学非常勤講師。主に集合住宅から商業や医療、教育施設、公園など、多岐にわたる屋外空間の計画・設計・監理に携わる。RCCM（造園）。CLA関西支部広報委員長。

日野誠次（ひのせいじ）



1957年大阪府生まれ。1981年信州大学農学部森林工学科卒。以来ずぅーとランドスケープに従事。現在、空間創研取締役。

野見山志帆（のみやましほ）



1997年九州芸術工科大学芸術工学部卒業、鴨川公園の整備や大学キャンパス計画、観光案内サイン整備計画などに関わる。現在は空間創研に所属。
キャンプやピクニックなどを通して、緑や自然に気軽に親しむこととバスケットボール観戦が好きです。子どもと一緒に、おとなも楽しめる公園づくりに、これからも関わっていきたいと思います。

橘 俊光（たちばなとしみつ）



1976年北海道大学農学部卒。兵庫県庁にて一貫して公園緑地行政担当。県立都市公園、国営明石海峡公園誘致、淡路花博企画、淡路景観園芸学校設置など。2006年県土整備部公園緑地課長。国営明石海峡公園管理センター長等を経て、2018年日本公園緑地協会常務理事。博士（農学）、技術士（建設部門ほか）、RLA。一般社団法人公園管理運営士会会長。

大瀧英知（おおたきひでとも）



1973年、岩手県生まれ、岩手大学大学院農学研究科卒業
（株）総合設計研究所企画事業部兼東北事務所長
公園計画、景観計画、植栽計画、復興まちづくりに関する計画、コミュニティデザイン、パークマネジメントに取り組んでいる。研究テーマは公園運営。
技術士（建設部門・都市及び地方計画）

加藤雄介（かとうゆうすけ）



2016年東北工業大学建築学専攻修士課程修了。建築設計事務所を経て、2020年に㈱総合設計研究所に入社。
入社後は、主に公園計画・設計業務に従事。東日本大震災の震災遺構、追悼公園の設計、全国都市緑化かわさきフェアの企画・設計に携わった。

大石佳奈（おおいしかな）



2019年に東北芸術工科大学デザイン工学部建築・環境デザイン学科を卒業。
同年に総合設計研究所東北事務所に入社し、地元である盛岡市にて勤務。
入社後は主に東日本大震災の震災遺構、追悼公園の計画設計を担当。

酒井 学（さかいまなぶ）



1993年東京農業大学農学部造園学科卒業。同年(株)プレック研究所入社。主に自然公園、環境保全、景観等分野の計画策定、2011年以降岩手県陸前高田市や大槌町の震災復興に関する業務に従事。2023年同社嘱託、（NPO）さくらの杜プロジェクト陸前高田理事（陸前高田市在住）。技術士（建設部門、環境部門）。

宮脇侑子（みやわきゆうこ）



2015年千葉大学園芸学部緑地環境学科卒業。同年(株)プレック研究所入社。入社以来、岩手県陸前高田市や大槌町の震災復興に関する業務、自然公園や都市公園に関する計画策定等に従事。近年は特に自然公園の適正利用に関する体制構築、制度化等に携わる。現在、環境計画部・次長。技術士（建設部門、環境部門）。

松岡央真（まつおかひろなお）



1996年福井県生まれ。2020年東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻修了。同年、三菱地所設計都市環境計画部入社。近年の業務として外構設計監理業務に加え、緑環境デザインマニュアルの改定検討業務、再開発事業における公共空間再編の検討業務など、ランドスケープを基軸に様々な規模・時間軸のプロジェクトに携わる。

坪田勇人（つぼたはやと）



1970年埼玉県生まれ。1994年東京大学大学院修士課程修了。1994年三菱地所入社。現在、三菱地所設計都市環境計画部ユニットリーダー。主な業務：仙台市泉パークタウン造成工事、池袋西口公園グローバルリング、Tokyo Torch 基盤整備工事等の設計監理業務。

佐藤雄紀（さとうゆうき）



2009年北海道大学大学院工学研究科空間性能システム専攻修了、同年三菱地所設計都市環境計画部入社。一級建築士。ランドスケープに関する主な業務：パレスホテル東京、ふなばし森のシティ、札幌国際大学キャンパス整備、大手町フィナンシャルシティグランキューブ、リンクスクエア新宿、常盤橋タワー、など。

中村大紀（なかむらだいき）



1992年東京都生まれ。2017年東京都市大学都市工学専攻修士課程修了、同年4月に三菱地所設計都市環境計画部に入社。近年の業務として、リンクスクエア新宿の土木・ランドスケープや、地域のまちづくりガイドラインの策定、安全確保計画の策定など、都市土木や都市計画に携わる。

熊谷 玄（くまがいげん）



1973年横浜生まれ。現代美術作家Studio崔在銀のアシスタント、earthscape inc.を経て、2009年STGK（スタジオ・ゲンクマガイ）を設立し代表を務める。東大まちづくり大学院などにて非常勤講師、一般社団法人ランドスケープアーキテクト連盟常任理事。主な仕事は「左近山みんなのにわ」「グランモール公園」「JR横浜タワー うみそらデッキ」など。

中村 覚（なかむらさとる）



神奈川県平塚市生まれ。2013年多摩美術大学環境デザイン学科ランドスケープデザイン卒業。外構職人、設計事務所を経て、2019年STGK入社。現在、STGKにてチーフデザイナー、武蔵野美術大学、多摩美術大学にて非常勤講師を務める。主な仕事は「THE OUTLET 北九州」「ryugon2期」「KISARAZU CONCEPT STORE」など。

